

### 第三百十一話 「愛国虚言」とは驚き！

「南京事件の探求」（北村稔著、文春新書）を読んで、「愛国虚言」なる語彙（184p）があることを知り、正直驚いた。彼の国が愛国虚言を信じている限り、歴史認識の共有・一致は絶対無理だ。



- 1 南京事件にかかる論の区分  
虐殺派、幻（まぼろし）派そして中間派に区分することが出来るという。
- 2 北村氏の本書執筆の基本的姿勢  
『虐殺の有無を性急に論ずるのではなく、大虐殺があったという「認識」がどのように出現したかを、厳密な史料批判と「常識」による論理で解明する。』（同書カバーから）であると云う。
- 3 H. J. ティンパリーとは何者か  
南京事件を最初に世界に知らしめたとされるのは、ティンパリーの「WHAT WAR MEANS: The Japanese Terror in China」である。著者の調査によれば、彼は正義の第三者ではないし、当該本は、国民党国際宣伝処の意を体しての発刊であった。（委細は割愛）
- 4 「南京事件」の問題点とは何か（同書を読んで、気になった事項）
  - (1) 国民党が積極的に推進した戦時対外宣伝には登場しない南京での「大虐殺」報道  
ティンパリーは大虐殺を伝えなかったし、南京の状況も他の都市と同等に報道されていた事実をどう認識するか？
  - (2) 南京事件を明らかにするとされた各種資料の記述は、南京事件判決の内容と矛盾している。著者が気になったのは、欧米人告発者の「observe」を「目撃」と訳していることだという。目撃と観察では証拠能力に差がある。中には、「過度の意識」「誤訳」がミックスしているケースもあり、勇み足の誤訳（改竄？）もある由。
  - (3) 英文資料は、中国人→書面報告中国人→欧米人告発者の手順で作成された。その信用度は果たして如何程か？
  - (4) 日本人資料編纂者による英語原文への脚色や改変も相当数ある由。
  - (5) 大虐殺の決定的証拠とされる「陥都血涙録」には、敵愾心を高揚させる日本兵が行ったとは到底信じられない作り話が多々、日本兵による放火とされる行為には再検討が必要、告発される虐殺行為の信憑性に対する大なる疑問、大虐殺が行われたにしては意外に平穏な南京市内の日常、兵士も自由に来訪していた事実等々を如何に理解する。
  - (6) 軍服を脱ぎ潜伏した中国兵の処刑が、已むを得ざる行為か或いは不当な虐殺か  
便衣兵は処形容認とする論と軍事裁判無き処刑は違反であるとする論があり、未だに論争が継続。問題は、日本軍の軍事行動における「政治性」の欠如であるとしている。日本軍にとって膨大な潜在的戦闘員の存在は不気味であり、食料も十分ではなく対応困難であったのは事実だ。ならば、それを国際社会に如何に理解させるかに知恵を絞るべきだったのではないかとしている。
  - (7) 三十万説の由来  
南京市内の戦闘行為以外の人的被害を2,400人とするスマイス報告（1938）と矛盾する三十万人説は、種々の資料から窺える当時の実情とは整合性ない。ティンパリーが送信した記事に三十万人とあり、これが由来ではないかという。
- 5 愛国虚言 中国人の証言が大虐殺を裏付けた。愛国心を鼓舞する誇張表現が許容されるとの愛国虚言があり、異議は漢奸、人民の敵としてレッテル貼りし、半信半疑でも口にするのは不可なのだと。何れにしろ強かな宣伝戦に敗北した日本だ？

（了）